

「台湾の川柳」 阿川弘之（作家）

台湾には、日本語の読み書きが自由に出来て、日本が好きで、日本の伝統文化や生活習慣に強い親しみを抱いてゐる人たちが大勢ゐた。過去形で「ゐた」と書くのは、その人たちの大半が日本統治時代の生れ、終戦の年学齢に達したばかりの童兒童女だつたとしても、もはや古稀が近く、構成員の急速に減りつつある世代だから。

此の台湾の老齡者社会の中に、大勢ではないかも知れないが、依然相当数の歌人がおり、俳人がおり、それぞれの結社を作つて今尚、日本流短詩創作の活動をつづけてゐる。彼らの地道な営みは、一つが「台湾万葉集」、一つが「台湾俳句歳時記」となつて結実し、近年日本で出版された。昔ポルトガルの船員が麗しの緑の島と称へたフォルモサ万葉集の編著者孤蓬万里（こほう ばんり）氏は、本名呉建堂、台北帝大医学部出身のお医者さんで、而も剣道八段、どこの国の詩歌ともあまり縁の無ささうなご経歴だが、さきの大戦末期、旧制台北高等学校理科の生徒当時、犬飼孝教授の万葉集講義に深い感銘を受け、それが歌作りを始めるきつかけとなつたらしい。

戦後、医業に携はるかたはら季刊誌「台北歌壇」を創刊し主宰し、長い歲月かけて、同好の士の詠草約五千首を集めた私家版「台湾万葉集」を作り上げる。東京の集英社がこれの復刊本を刊行（早くから注目してゐた詩人大岡信氏に負ふところ大きかつたと聞く）同書は一九九六年度の菊池寛賞を受賞した。今はもう故人だが、その頃壮健だつた呉建堂医学博士が台湾より来日、賞の贈呈式に出席、さかんな拍手を浴びて、新聞雑誌でも報道され、「日本語のすでに滅びし国に住み短歌（うた）詠み継げる」（孤蓬万里作歌）人々のことが、我が国読者層の間に広く知られるやうになつた。

もう一冊の「台湾俳句歳時記」は、「台湾万葉集」に八年遅れて二〇〇三年、東京西神田の言叢社が出した。著者黄靈芝氏は一九二八年台南市の生れ、作家で彫刻家で台北俳句会会長、著者自身の格別の配慮か、篇中各所に台湾の風物民俗を撮つた美しいカラー写真が百七、八十枚ちりばめてあつてなるほど台湾と日本では四季の移り変はりがちがふ、年中行事のやり方も、花や鳥や魚の種類もちがふ、独特の歳時記が必要だらうなとよく分り、句作をしない私にも、読んで面白く眺めて楽しい本であつた。

ところでさて、此処まで実は前置き、これからが本論です。

日本の統治下を離れて六十一年、日本語を話せぬ世代が多数派となつた台湾に、今も歌人俳人がをり歌壇俳壇があることは叙上の通り、一応の認識を私も持つてゐるつもりだつたが、川柳を作る人たちがゐようとは、およそ想像すらしてゐなかつたから、先々月「酔牛」といふ題の台湾川柳句集の寄贈を受け、内容を見て驚きましたねえ。

著者は「台湾川柳会」の前会長李琢玉氏（本名李瑛璋）発行元は大阪の新葉

館出版、番傘川柳会その他の会の役員で日本の川柳作家として名高い今川乱魚氏が編者をつとめてゐる。乱魚氏と並んで、著者の友人蔡焜燦氏が序文を寄せており、その一節に曰く。

「あの男は、口が裂けても『私は中国人だ』とは言わない」

「あの男は、知日家でもなく、親日家でもない。私の造語『愛日家』でもない。自らを『懐日家』と名乗っておる」

そのあと、あの男、すなわち琢玉宗匠が、戦争中召集を受けてお国の為に一所懸命戦つた日本陸軍の兵士だつたことが匂はせてある。

蔡焜燦さんは亡き司馬遼太郎氏の著作に度々「老台北」(ラオタイペイ)の名で登場する台湾財界の雄、読者の多くが御存じであらう。その蔡さんが乱暴な言い方で「あの男、あの男」としたしみを示す本名李瑛璋氏の、「懐日派」風川柳を五句ばかり引用紹介して置かう。

湯豆腐が満悦至極総入れ歯

文部省唱歌は覚えてる痴呆

過ぎ去った国の旨さを握り寿司

カタカナ語昭和も終に遠くなり

世界一イジメ甲斐あるクニ日本

読んでくすと笑ひさうになるのが川柳本来の持ち味であらうけれど、私は何遍か、ほろりと涙ぐみさうになつた。李さんの日本語を、軽みと堅確さと両方兼ね備へた由緒正しい立派な日本語だと感じたのが、ほろりの原因の一つである。

「酔牛」巻頭、著者の肖像写真に「1999年1月8日、友愛会(美しい日本語を守る会)にて撮影」とキャプションが添へてあるのを見て、一層その感を深くした。さうか、現在の日本は、表向き国交を絶つてゐる国の老詩人に頼つて国語の品位を保つて行かねばならぬ程、文教面で落ちぶれた国になつてしまつたのかと思つた。

此の人の、或は此の人たちの、日本へ寄せる懐旧の情、「世界一イジメ甲斐ある」現状に対する憂慮、それを私どもはどう受けとめ、何を以て応へたらいいのだらう。私なぞ、涙を泛べてただ感謝するだけの能しか無いけれど、若い元気な世代の有志はどうか発奮して下さい。たかが川柳と思ふ勿れ。十七文字の中に、屢々人の世の重大事が秘められてゐる。

ちなみに、琢玉宗匠李瑛璋氏は、話が前後して礼を失するかたちになるが、かねて癌を患つてゐて、著書の上梓を待たず、昨年満八十歳で亡くなられたさうだ。未知の間柄に終り、歿後初めて業績を知つたわけだが、川柳に托した故人の素志を偲びつつ、謹んで哀悼の意を表する。